

提唱 槐安国語鈔講話(八)

頌古

第五則 百丈耳聾

白田 劫石

垂示に曰く、有る時の一喝は金剛王宝剣の如く、有る時の一喝は踞地獅子の如く、有る時の一喝は探竿影草の如く、有る時の一喝は一喝の用を作さず。

是を済北の四喝と道う。

生死の業根を截断し、小果相似の窟宅を吼破し、来者の真偽を弁じ、進趣の邪正を分かつ。

特に無功用の喝子に到って作麼生か商量し去らん。

臨済に四喝がある。これは、祖師の慧命の玄旨を開示したものであるが、この四喝とは如何なるものであるか、白隠老漢は、百丈再参の因縁をにらんで垂示した。

「有る時の一喝は、金剛王宝剣の如く」これは、いろいろな理屈道理や葛藤^{かつとう}、仏見法見を截断して、自我の氣息を絶してしまうはたらきの一喝である。老漢は、これを「生死の業根を截断す」という。

次に「有る時の一喝は、踞地獅子の如く」これは、獅子の威寧が妖怪変化やいろいろな造作や功德を近づけしめない勇猛さをもち、ひとたび吼哮すれば野干腦裂すという力をもつ一喝を示したもので、踞地においてその威寧が最もよく發揮されるので、踞地

獅子といった。老漢は、これを「小果相似の窟宅を吼破す」という。

次に「有る時の一喝は、探竿影草たんかんようそうの如く」これは、目前に出てくる相手の学人の境涯見地の浅深邪正を照し出してはかる一喝である。この一喝の前では、如何なる修行者もおのれの真偽をかくすことはできない。探竿影草とは、竿を以て水の浅深をはかり、草の影によって日の傾きを知るといふ、探りを入れることである。老漢は、これを「来者の真偽を弁じ、進趣の邪正を分かつ」という。

最後は「有る時の一喝は、一喝ゆうなの用を作さず」これは、一喝を吐いても、喝のけぶりもないという一喝で、これこそが仏々祖々不伝の向上しやしの些子で、臨済の喝の玄旨である。これは、何としても講釈はできない。この一喝で臨済に相見できるというもので、白隠老漢は、これを「無功用の喝子」といっているが、こいつばかりは如何ともすることができない。

拳す、百丈懐海一日衆に謂って云く、仏法は是れ小事にあらず。老僧 昔馬大師に一喝せられて、直に得たり三日じろう耳聾し眼暗きことを。黄檗拳を聞いて舌を吐く。丈云く、子なんじ 已後馬祖いごに承嗣することなしや。檗云く、然らず。今日師の拳するに因って馬祖の大機大用を見ることを得たり。然も且つ馬祖を識らず。もし馬祖に嗣がば、我が児孫を喪わん。丈云く、如是如是。

本則は、百丈再参の因縁を拳して、師承の一大事を明らかにしたおそるべき一則である。

先ず百丈再参の因縁について述べることにする。

百丈懐海禅師が修行中で見性のいけていない時分のこと、師の馬祖道一禅師に侍して野道を歩いていた。ちょうど足もとからバ

タバタバッと野鴨がとび立った。馬祖は、これを直きにとらえて百丈につきつけた。活きた禅機横溢おういつの商量がはじまる。“これ何ぞ？” 勿論これは、とび立った鳥の名をきいているのではない。こやつを悟らせてやろうとの慈悲である。百丈は、まだ師の肚が分からぬ、ありのままの事実を述べた。丈云く“野鴨子。”

そこで馬祖は、第二の矢を放った。祖云く“何れの処にか去る？” そいつは何処へ行ったか？ 丈云く“飛び過ぎ去る”これでは仕方がない。全く師の肚が分らぬ。間が抜けていて、主人公がお留守じゃ。他の噂話をしている。

そこで馬祖は、遂に非常手段を弄した。百丈の鼻頭をとってねじり上げた。

“さあこん畜生奴！ 何処へ行ったのじゃ！”という有様。

さすがの百丈、痛さにたえかねて、“アイタッタッタ！”と忍痛三昧。その言下に、“ウンなるほど！”といけて疑団がとけた。こいつが手に入った。

まことに有難いことである。

翌日、馬祖が講座に当たって法堂に出て仏前に礼拝をしようとした。会衆は、いよいよこれから講座が始まると、心待ちにして合掌している。

百丈は、そこへのこのこと出て来て、その拝座をグルグルッと巻いて片づけてしまった。提唱などもう沢山であるという肚である。それを見て馬祖は、スーッと方丈に戻っていった。

馬祖は、百丈を隠察に喚んで、聞きただした。最後にほんものかどうかを黒眼玉で勘別しようという魂胆である。

“わしはまだ一言も講じていないのに、お主は何故席をまいてしまったのじゃ？”百丈は、これに対して何とも答えず、“昨日は、和尚に鼻をいやというほどね押し上げられ、骨の髄まで痛さが身にしみました。”馬祖は、“こいつつまらぬことを言う奴じゃ、

何をつかんだのじゃ？”

それに対して百丈は、“今日はチツとも痛くもかゆくもありません。”

これをみて馬祖云く“汝、深く今日の事を知る”とゆるされた。百丈乃ち作礼す。

こういう一段の因縁によって百丈が初関を透過した。

次は、その再参の因縁である。

これは、悟ってはみたものの、未だ境涯に徹底をかくところがあつて、最後の仕上げをして嗣法するという一段である。

禅では、悟後の修行というのが大事で、これで悟りの滓^{かす}をすっかりとり去ってしまわないと、ほんものにならない。途中でやめると、変なものをもって、自他を損なうこととなる。我見というものは、極めて根深くおそるべきものである。悟ったといつても、悟りそのものにくっついている我見というものは、自分では気づいていないだけにスクリ取り去るのは難しい。

初め菩提心をおこしたときに立てた仏の誓願である四弘誓願を、修行の基本に据えて進んでゆかねばならぬ。

百丈は再び馬祖に参じた。馬祖は、目で禅床角頭の^{ほっす}扠子を見る。ちょうど百丈が侍立しているのを見て、馬祖が扠子をとって拈じて豎起した。百丈、これをみて云く、“この用^{ゆう}に即するか、この用を離するか？”馬祖は、それを聞いて、何とも言わずに扠子をもとのところへスーッと掛けた。

しばらく侍立していると、今度は馬祖が百丈に向かって言う、“お主は、以後どのように為人度生のために説法するか？”

それを耳にするや、百丈は黙って扠子をとって豎起した。馬祖は、これに対して云く、“この用に即するか、この用を離するか？”それを聞くと、百丈は、前に馬祖がやったのと寸分も違わず、黙つてもとのところへ、スーッと掛けた。両鏡相照らして中に一点の

影像がない。

馬祖は、それを見るや威を振ってカーッと一喝した。百丈、その一喝によって大徹大悟した。

ではこれは、一体全体何を大悟したのか？

後になって、百丈は黄檗に白状した。“自分はそのとき馬大師に一喝されて、三日^{じろう}耳聾した。すっかりかなつんぼになってしまったわい！”黄檗は、それを聞くや、思わず寒毛卓豎し、ゾツとなり、“エーッ！”と舌を吐いた。

これが、百丈再参の因縁である。

この因縁は、的々相承の仏祖の慧命の正体を^か噛み破る伝法の一則である。まことに見師に等しきときは師の半徳を減ず、見師に優れて初めて伝授するにたえたり。

師家に参じて二十年三十年と悟後の修行を重ね、^{しんかん}辛艱をきわめて精錬し来った悟道の境涯が、一度に打失されて堂奥に入り、仏祖に親しく相見し、被底の穿たるるを識る時節である。

世界には、宗教の種類は極めて多いが、その中でこの堂奥の秘事を明らかにして、如是法の当体を伝えうるものは、恐らく祖師禪を措いてないであろう。まことに世界に冠絶する秘法というほかはない。

これを明らかにすることこそ、正に禪の修行の眼目なのである。黄檗希運禪師が、これを聞いて^{しょうぜん}悚然として舌を吐いた。

白隠老漢は、「評」の中で、これについて次のように述べておられる。

「黄檗大師、如上の因縁を聞き、魂飛び魄散じて、覚え舌を吐く。これより大機を発し大用を興して、仏祖難入の万仞の参天の荆棘を栽え、鬼神も不測の万里^{そうち}匝地^{とど}の牢関を鎖して、末代小果の瞎流^{ひっさつ}を逼殺し、諸法相似の禅徒を悩乱して以て仏祖の深恩に報答す。是れを祖祖不伝の秘訣となす。…今時(禅学の徒は)従上の

師資相承の悪冤あくえんを聞いて、心神驚動し肺肝碎破し、気索き志疲れて、気を呑み去らん…」

ここで白隠老漢が、師資相承の悪冤(うらみの縁)とっているものは何であるか、旧参底のよく参得しなければならぬところである。仏の正法というものは、まことに容易ならざるものがある。

さてこの百丈再参の因縁をふまえて、本則が挙揚される。

百丈懐海 一日衆に謂って云く、仏法は是れ小事にあらず。老僧 昔馬大師に一喝せられて、直に得たり三日耳聾し、眼暗きことを。

百丈懐海禅師の述懐である。

“あの馬大師の一喝が、骨髓にまで響きわたり、それからというものは、すっかりと耳が聾となり、目が見えなくなって盲となってしまうわい。実にうらみても余りあることである。”

ここに下語。【曾て客となるに慣れて、正に客を憐む】修行というものの笑うに堪えたり悲しむに堪えたりという真情は、自分が実際に骨身にしみて体験してみないことには分らない。身に覚えがあるので、同病相憐れむこの気持がよく分かるというものである。

又【豈ただ三日のみならんや、百千万劫 耳聾し、眼暗し】これは、三日という言葉についてまわるといかなので注意した。百千万劫耳聾じゃ。法法本来 耳聾というべきである。

黄檗 拳を聞いて舌を吐く。

これは、前にも言ったように、百丈の挙揚を聞いて、黄檗が悚然としてエーッと舌を吐いた。

下語。【身心脱落 脱落身心】もとも子もすっかりとなくなった。二十年三十年と辛苦して悟りに悟った悟道のあとかたもない。よくきいている。

さて次は、本則の主眼である師資相承の嗣法の大事を明らかにする一段である。

丈云く、子 已後馬祖に承嗣することなしや。

百丈は、黄檗に対して、“それではお主は、以後馬大師に嗣法することになるのではないか”面授面稟めんぼんの秘事について、黄檗の肚を見ようとした。仏祖の慧命というものは、一器の水を一器に移すように、生きた人間から生きた人間に嫡々相承される。誰の法を嗣ぐということの証明がないと、ほんものではない。

これを師資相承の悪冤という。ここに個人の悟道の境地を超えた祖師の慧命が秘在している。いかに参天の荆棘を透過し、万重の牢関を打破して大機大用を得たといっても、この師承の一大事を透得しなければ、伝法することはできない。

黄檗の次の一語は、これを明らかにしたものである。

檗云く、然らず。今日師の拳するに因って馬祖の大機大用を見ることを得たり。然も且つ馬祖を識らず。もし馬祖に嗣がば、わが児孫を喪わん。

ここに白隠老漢は、【獅子は鈎戟こうげきを畏れ、虎は火を畏れ、象は鼠を畏れ、狼は鑊くわく(ドラ)を畏れ、祖は児孫を喪わんことを畏る】と下語されている。

祖師の願うところは、ただこれ正法の伝法流通であり、嗣法の児孫がなければ、いかに大力量を具有するといっても、一代でその法は絶える。生々世々に亘って伝法し、四弘誓願を転ずるといふ素願を全うすることはできない。嗣法の重さは、何ものにも比しがたい。

百丈は、これを聞いて肯った。

丈云く、如是如是。

そこに容易ならざるものがある。ここに下話。【見 師に等しきときは師の半徳を減ず、見 師に過ぎて正に伝授するに堪えた

り】かくて初めて児孫を失わぬことができる。

青は藍より出でて藍よりも青い。師が弟子を印可するのは、容易ならざることである。

頌に曰く

一喝耳聾して天地黒し
 当機舌を吐き荆棘を生ず
 虚を承け響を接す 意論じ難し
 両両三三 好し動著するに

一喝耳聾して天地黒し

先ず百丈の三日耳聾の端的を頌じた。

いままで長い間辛酸を重ねて修行に打ちこみ、身命をなげうって見性の実をあげ、真如の月を証することができたが、馬祖の一喝によってその那一物も破碎されてもとのもくあみとなった。耳聾し眼瞎して、得たところのものがすっかりとなくなって、大地黒漫々”となる。

老漢は、ここに【山形の柱杖子を拗折して、従来大地黒漫漫】と下語。

また「評」では、これを次のように述べておられる。「百丈大師三日耳聾の端的に到って、従前所得の悟解了知を打失し、従前所証の禅道仏法を忘却し、我法二空の見泥獄を撃砕し、今時那邊の瞎兔径を踏断するの外、点検し看来れば纖毫の奇特の事を見ず。唯是れ旧に依って眼横鼻直、大冶の精金変色無きに似たり。一点の仏法無く、一点の世波無し。所以に国師曰く、一喝耳聾して天地黒し、と。」実に寒毛卓豎というほかはない。

当機舌を吐き荆棘を生ず

これは、黄檗がこれを聞いて悚然として舌を吐いた有様を頌じ

たものである。

この大機大用こそが、諸方相似の禅学者を逼殺し、牢関を鎖して參天の荆棘を栽え、臨濟を叩き出して、仏祖の慧命を進展せしめた端的なのである。

老漢は、ここに【虫の雄が上風に鳴けば、雌は下風に応ず】と下語。おいと呼べば、はいと答える啐啄同時の機用、無賓主の対応、知音同士ピタッと合って、そこに些かの我他彼此もない、見事なものと讃えた。そこに荆棘など毛ぶらいもない。

虚を承け響を接す 意論じ難し

このような大火聚のごとき悪毒の語話にあうと、知解禅学の徒は、心神驚動し、臆測して等閑の会をなし、みだりに鄙判を下して、後学を誤らしめる。

一犬虚に吠えて万犬実と伝うという有様で、虚を承け響を接することとなる。

物質文明が進み、生活が豊かになればなるほど、道心が薄れ、精神が荒廃する。禅学の徒が多くなって来る。

老漢は「評」において「今時紙伝弘伝、虚を承け響を接する底の贗緇がんにし(にせ坊主)、此れに両両、彼れに三三、従上師資相承の悪冤を聞きて、心身驚動肺肝碎破、気索き志疲れて、気を呑み声を呑み去らん」と述べておられる。

ここには【智者は路を離れて道を得、愚者は路を守って道を失う】と下語。形だけの抱道の士では、真に道を護持し後世に伝えることはできない。「好事も無きには如かず」である。

両両三三 好し動著するに

これは狂風裡に法灯を真に護持する者の少なきを慨かれた国師の肚裏である。白隠老漢も「評」で「悲しきかな、末代の衰弊澆季の荒涼、わずかに三箇五箇、従上向上の芳躅を慕い、孤危の真風を挽回せんと欲して、艱辛をなめ飢凍を忍びて、精鍊苦修する

者有りと聞くときは、無慚昏愚の外道、毒氣深入の魔党、これに
 両兩、かれに三三、妬火骨に徹し嫉焰膽を焦し、ひそかに窺いひ
 そかに計って、これを残害しこれを凌奪せんと欲す。…豈これ東
 海日多の孫と称して可ならんや。……既に言う、“好し動著する
 に”と吟じて、好字に到って国師大いに工夫あり。言は今時動著
 せば、まことに好し、是れ可なり。後五百年老僧世を去ること久
 うして、子孫必ずこの真風を阻害せんと欲する底の魔党、日に多
 からん。」と述べておられる。修行もこの「百丈再参」まで来て、
 禅の玄旨を了得するものは、暁天の星のようで、多くはこれ舟を
 刻むの徒である。

ここでの下語。【三八九を明らめずんば、境に対して所思多し】

この三八九を、三八九は二十で、二十は念に通ずると説くもの
 があるが、ただこれ三八九で、少しでも念慮をいれてはいけない。
 わずかに意あれば、自救^{さんばつく}不了^{じくふりょう}である。這の一念、元来我他彼此は
 全くない。

『会元』慈明章に「昨日櫻孩となり、今朝年老を祝す。未だ三八
 九を明らめざれば 古皇道を踏み難し」とある。夢幻の身で一念
 不生の道を明らめよとなり。

動著することなかれ！ 動著すれば三十棒！

著者プロフィール



白田劫石（本名 / 貴郎）

大正4年、東京生まれ。東京帝国大学倫理学科
 卒業。千葉大学教授、聖徳学園短期大学教授を
 歴任し、現在、千葉大学名誉教授。昭和11年
 立田英山老師に師事し、人間禅教団第三世総裁
 を経て現在同教団名誉総裁・師家。庵号 / 磨輒
 庵。